The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The prediction of first episode of panic attack among white-collar workers
Author(s)	渡邊, 章
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45532
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【118】

氏　　名	渡　邊　　章（わたなべ　あきら）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学　位　記　番　号	第　１９３５１　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 医学系研究科未来医療開発専攻
学　位　論　文　名	The prediction of first episode of panic attack among white-collar workers （ホワイトカラーにおける初回パニック発作エピソードの予測）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　武田　雅俊 （副査） 教　授　杉田　義郎　　教　授　井上　洋一

論　文　内　容　の　要　旨

〔目的〕

パニック発作は複数の危険因子が関与して引き起こされるものと考えられている。従来の疫学的研究では生涯有病率に性差が認められること、パニック障害と大うつ病の間には密接な関係が認められることが報告されている。また、パニック障害の発症には遺伝的な要因が関与していることが強く支持されている。心理社会的研究からは親の養育態度、病前の性格傾向、発症に先行するストレスフル・ライフイベントなどがパニック発作の発症に関係があることが指摘されている。しかし、これらの危険因子がどのように絡み合いパニック発作を引き起こすのか、経時的・統合的にその因果モデル（パスモデル）を構築した研究は少なく、特に初発パニック発作に関しては我々が調べた限りではその報告はない。今回、５年間に渡り追跡調査した 2,000 人規模のホワイトカラーでの前向きオープン・コホート研究を基にし、これらの危険因子がどのように絡み合い初発パニック発作を引き起こすのかを明らかにすることを目的に、新たなパスモデルを構築し解析したので報告する。

〔方法〕

【調査日時と調査対象】1997 年から 2001 年までの５年間の前向きオープン・コホート研究を行った。調査対象は、海上保険会社およびその関連会社の従業員、1,812 名である。

【調査方法と調査内容】調査は自記式質問紙法を用いた。調査内容は年齢、性別、親の養育態度、神経症的傾向、外向性、大うつ病の既往および現症、パニック発作の既往および現症、最近６ケ月以内のストレスフル・ライフイベントである。

【データの整理】４つのデータセット（T1/T2）、すなわち 1997 年/1998 年、1998 年/1999 年、1999 年/2000 年、2000 年/2001 年が得られた。重複を防ぐため各人においてデータセットはひとつのみ用いた。このうち、初発パニック発作発症前/初発パニック発作発症後となるデータセットがあればそのセットを初発例として採用した。他のデータセットにおいては最新のセットを採用した。このうち、T2 以前にパニック発作の既往を持つ者（N＝111）、および T1 における調査内容へのうつによる影響を除外するため、T1 で大うつ病の現症を持つ者（N＝99）を除いた合計 1,612

例、（うち、初発例（N＝25）、未発症例（N＝1,577））を母集団として、初発パニック発作の危険因子、およびパスモデルを検討した。データの分析には汎用統計パッケージ SPSS Ver. 11.0 を用いた。

〔成績〕

母集団（N＝1,602）の平均年齢は 34.4 歳（SD＝10.5）、男性 785 名、女性 817 名であった。調査時での時点有病率は 1997 年から順にそれぞれ 0.9%、1.9%、2.2%、2.9%、2.6%であった。

【ロジスティック回帰分析】初発パニック発作を引き起こす危険因子の分析にはロジスティック回帰分析を用いた。調整しないオッズ比（Exp(B)）を算出したところ、大うつ病の既往（Exp(B)＝5.31、$p<0.001$）、最近６ケ月以内のストレスフル・ライフイベント（Exp(B)＝2.96、$p=0.02$）の２項目が初発パニック発作を引き起こす有意な危険因子であった。

【パス解析】初発パニック発作の経時的な病因論を明らかにするためにパスモデルを設定した。説明変数は性差、親の養育態度として過保護、神経症的傾向、大うつ病の既往、最近６ケ月以内のストレスフル・ライフイベントの５項目。目的変数は初回パニック発作エピソードの発症である。このモデルを解析するためにパス解析を行った。モデルの適合度については、χ^2乗検定を用いた有意確率を示す p 値が 0.269 であり、加えて RMSEA は 0.013 であった。以上よりモデルの適合度からみて今回のモデルは全体として成立していると考えられた。しかし、目的変数の重相関係数は 0.155 であり、目的変数の分散の 2.4%を説明するにすぎなかった。説明変数の内、神経症的傾向、大うつ病の既往、最近６ケ月以内のストレスフル・ライフイベントは初回パニック発作エピソードの発症に対して直接効果を有しており、その値はそれぞれ 0.06、0.08、0.1 であった。性差、過保護は初回パニック発作エピソードの発症に対して直接効果を有さなかった。

〔総括〕

パスモデルは成立したが目的変数の持つ分散の説明率は低く、そのため説明変数として性差、親の養育態度として過保護、神経症的傾向、大うつ病の既往、最近６ケ月以内のストレスフル・ライフイベントの５項目を用いたこのパスモデルでは、初回パニック発作エピソード発症に至る経時的な病因を十分に説明できないという結果が得られた。しかしモデル全体としては成立していたことから、初発パニック発作の病因を経時的に観察する中で今回用いた説明変数がどのように影響しているかという若干の情報を得ることができた。今後、今回は調べていない他の強力な説明変数、例えば家族研究や双生児研究などから得られる遺伝的要因を含むパスモデルの作成が必要と考えられた。

論文審査の結果の要旨

パニック発作の発症に関する個々の危険因子がどのように交絡し発症に至るのかを統合的に解析した研究は稀であり、その中でも初発エピソードについて統合的に解析した報告はない。

本研究は、ホワイトカラーを対象に５年間に及ぶ 2,000 人規模のコホート研究を行い、自記式質問紙の回答を基に、性別・親の養育態度・性格傾向・大うつ病の既往およびストレスフル・ライフイベントの５項目から、初回パニック発作エピソードの発症に至る経時的・統合的な因果モデル（パスモデル）を構築し解析したものである。解析の結果、これら５項目の説明変数のみでは初回パニック発作エピソード発症に至る経時的な病因を十分に説明できないことを明らかにしている。しかし同時に、説明変数間の直接効果、間接効果を明らかにし、これら説明変数の交絡関係を明らかにしている。

パニック発作の初発エピソードに至る経時的な病因を論じたパスモデルは初の報告であり、これら予測因子をふまえた発症予測にも資する臨床的有用性もあり、学位に値するものと認める。